1-4

主題	新型コロナウイルスのクラスター発生における対策
副題	養護老人ホームの人員配置で２度のクラスターを経験して分かった事

キーワード 1	新型コロナウイルス	キーワード 2	クラスター対策	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福）同胞互助会　養護老人ホーム偕生園
発表者（職種）	小池夏樹（生活支援員)、栗原裕代（主任）
共同研究(実践)者	なし

電　話	042-541-1236	ＦＡＸ	042-545-5301

事業所紹介	昭和 34 年開設。140 床の施設です。敷地内には四季を感じられる桜、梅に紫陽花。利用者様と一緒に耕す畑やイベントを行うこともできる公園等があり、地域の方々との交流も盛んです。また法人内に特養や在宅サービス事業、診療所を併設しており、各事業所と連携を取りながら生活して頂けるよう取り組んでいます。

《1.　研究(実践)前の状況と課題》

新型コロナウイルスの大流行の中、園内で１人目の感染者が発生。初期対応によりクラスター発生には至らず。次にオミクロン株の出現により感染の脅威が増した。第６波が発生し、1度目のクラスター。複数のフロアで同時多発的な感染拡大、職員も発症し、感染者の隔離や制御が難しくなった。園での感染対策と、利用者のニーズ・ケアの両立が難しいという課題や、職員不足による感染拡大防止の困難さが浮き彫りになった。これにより、適切なケアや利用者の生活水準の維持が困難となった。

《2.　研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的としては、新型コロナウイルスのクラスター予防対策をしていたとしても、クラスターは起きうる状況で、クラスター発生時の感染の拡大を抑えるための対策を立てること。
仮説としては、感染リスクの最小化・感染リスクの知識と十分な人員確保・感染者早期発見・隔離の強化・施設内の環境整備と衛生管理の徹底。適切な対策とリスク管理を行うことで、新型コロナウイルスのクラスター発生を最小限に抑えることができると考えられる。

《3．具体的な取り組みの内容》

職員の半数が自宅療養となり、食事の配膳や下膳に多くの人的リソースが必要となったが、他の事業所からの応援や派遣職員の協力による、職員不足を乗り越える取り組み。利用者への食事提供方法にも変更があり、従来のバイキング形式から全部屋への配下膳と使い捨て容器の導入が行われ、保温状態や配膳人員などの課題も解決していく取り組み。感染者隔離の問題として、高齢者の感染リスクの高さや施設内の密集環境が起因していた為、感染者の移動やゾーニングによる区分分けをする取り組み。このような取り組みを初めて経験するクラスターの中で模索しながら行っていった。

無断転載・複製を禁じます。

《4．取り組みの結果》

２度目のクラスター時は、園内で５人以上の陽性者が確認された時点でクラスターと認定されたが、前回のクラスター対応の改善を踏まえ、ゾーニングや防火扉の使用によるフロア間の隔離が進められ、陽性者数は僅かな増加で留まった。職員の感染対策の徹底やガウンテクニックにより、職員は陽性者を出す事なくクラスターを終息させることができた。法人の強みとして他事業所との連携を活かした対応も必要な状況で行われた。２度目のクラスターはこれらの取り組みによって終息していった。

《5．考察、まとめ》

対策や改善は終わることのない中で、２ 度目のクラスター発生時も一時の混乱や、運営がスムーズにできたわけではない。何が起きてもいいようにする危険予測と対策を行っていても、そこに携わるのは人で相手となるものも人である。今後もどのような脅威に脅かされるか分からない時代、我々は常に様々な対策を講じていかなければならないと感じた。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7．参考文献》

厚生労働省
「新型コロナウイルス感染症について」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html

《8．提案と発信》

パンデミックが発生している状況下で、感染を未然に防ぐ取り組みも大事である。しかし、未知の感染症が流行した際、その場での対応が必要な時、現場レベルの対策が常に必要であるということを痛感しました。これにより多くの事業所にも伝播できる事柄だと感じました。

無断転載・複製を禁じます。